

うきたむ

第8号

1996.10.20

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館報

山形県東置賜郡高畠町大字安久津2117 TEL(0238-52-2585)
FAX(0238-52-4665)



わたしの縄文土器、いよいよ完成。土器づくり教室にて7月14日。

『円』と縄文文化

本館運営協議会委員

佐藤 鎮雄

三内丸山遺跡の発掘調査によって、従来の縄文のイメージが塗り替えられたことが盛んに強調されるようになってきた。最近では「縄文の都」という言葉まで出現している。果たしてその通りであろうか。

確かに多様な人々が議論することは、素晴らしいことなのだが、飛躍しすぎた部分は正さなければならぬ。考古学の素晴らしさは、よく観察したり緻密にデータを集積していくことにある。

かつて私は、縄文時代後期の土器を求めて県内を探し歩いたことがあった。当時は発掘されたものがほんのわずかで、たまたま採集された小さな土器片がほとんどであった。そこで、一片一片の土器片を観察して土器の全体像に迫らなければならなかった。そのときこれまでの完形品にのみ頼っていた方法では探究できない壁に遭遇したのであった。

何日間か土器片を眺めて、ふと思いついたのは「縄文土器は円筒形が基本にした形であるから円をたくさん積み上げたものであり、文様もその器面を単位の文様が一定の原則で繰り返されているので、破片であっても図上で復元できる。」ということであった。それ以来、私の研究は大幅に進んだ。

よく観察してみると縄文土器だけでなく縄文文化には「円」を取り入れた形のものがたくさんあり、意識的に「方形」のもの是非常

(次頁へつづく)

五五〇〇年前のすばらしい技術とくらし

縄文世界へ夢ささごそう

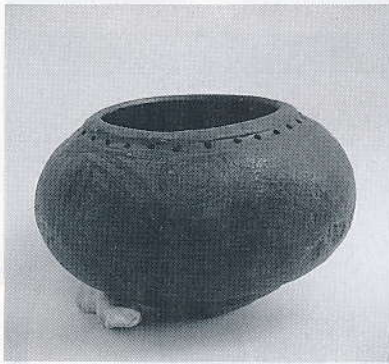
高島町押出遺跡から発掘された一〇四一点の貴重な遺物がこの六月に、国の重要文化財に指定された。高い技術を示す漆の製品や木製品、縄文ツッキーなど第一級の縄文時代の資料で、その内容において三内丸山遺跡の遺物にまさるとも劣らない。これを機に、すぐれた縄文の文化遺産を公開する「縄文のタイムカプセル・押出遺跡展」が開催されている。期間は十一月末日まで。

うるしの起源のナゾにせまる！

土器に漆を塗った彩漆土器がたくさん掘り出されている。赤漆を地に、黒漆で渦巻文を描いている。多分漆に炭や煤を入れて黒色化し、赤漆は酸化鉄や水銀朱を混えたものと考えられている。漆の樹液は、山うるしではなくもつと大きなイエウルシ

からとったもの、それを精製し、何回も塗り重ねている。漆の技術は完成の域に達したものだ。これまで漆の技術は、三〇〇〇年ほど前に中国から伝えられたと唱えられてきたが、それよりもはるかに古い製品が押出から発見されている。

赤漆を地に黒漆で文様を描いたもの、赤漆だけ塗ったもの、



彩漆土器

さいわい低湿地であったために木製品も残った。木製の大杯（盤）は、外側に黒漆、内側に赤漆が塗られ、渦巻の文様が描かれたものもある。ほかに舟をこぐかい、篋状のもの、杓子、鋸状の木製品などがある。

木工技術の巧みさ

内面を赤漆、外面を黒漆で塗った木胎漆器、漆で塗り固めた櫛など、彩漆土器のみではなく、多面的に漆を利用していることがわかる。もちろん漆が入った容器も出土している。全国でこれだけ多くの漆製品を出土した縄文遺跡は余りない。それらが一堂に展示されている。

いまだつたら、のこぎりもろくろも、かななや小刀もあるから、そんなに困難ではなく作られるだろう。

ところが五五〇〇年前、金属のなかった時代に、石器で削ったり、切ったりしたものであるから、その器用さに驚かされる。これには木の性質をよく知らないければ、できる仕事ではない。

押出の人びとは、卓越した木工技術や漆の技術をもつ專業集団であったかと疑いたくなる。

樹皮製の小袋

青森市の三内丸山で樹皮を編んでつくったポシエットが見つけられ話題になった。それよりも以前に、すでに押出で樹皮製の小さなお守り袋の



展示状況

（前頁よりつづく）
に少ない。早期前期の堅穴住居は方形プランであるが、中期からは円形プランに変わるなど「円」志向である。他に環状列石、土偶、石棒、石斧等々「円」を感じさせるものは多い。村山市の西海淵の集落プランも「円」である。

「円」は、文明以前の縄文人にとって一つの極致に達した世界概念でなかったのだろうか。そのような仮説でみると、弥生時代以後、急速に「方」が追究されて来たように見える。都城制や条里制はその最たるものであるが、国あつての都であり、このような史観からは縄文の都は見えて来ない。稲荷森前方後円墳に「円」と「方」の調和の意味を考えるこの頃である。

ようなものが出土しているのである。

多分、こはく製の玉や耳飾りなどだいたいなものを入れて持ち歩いたのであろうか。これを下げた若い女性が、森のなかを歩いている姿が目にかんできると。その他、樹皮や木のせいの利用した編物の残片も各種のものが展示されている。

考古に学び、原始に遊ぶ

心なごもむ豊かな行事

考古の会、三内丸山へ

昨年九月に発足した「うきたむ考古の会」は、今年の四月「うきたむ考古」の創刊号を発刊した。



三内丸山にて

六月一日・二日、青森一泊でみる、きく、ふれる遺跡の旅「三内丸山遺跡と亀ヶ岡文化を訪ねる旅」を行った。これにはバス

一台満席の四五名が参加。

北のまほろば三内丸山遺跡を成田滋彦さんの説明でたっぷり見学した。大型復原住居をはじめ遺跡やすばらしい遺物に感動の連続であった。

その後、青森県立郷土館を福田友之さんの説明で夕刻まで見学。市内の旅館でくつろぎ、夜の青森を歩いたが、期待した津軽三味線にはお目にかかれなかった。

翌二日は、津軽の木造町へ。駅の大土偶の前で記念撮影の後、展示施設カルコや亀ヶ岡遺跡に寄り、縄文の終りに華麗な花を開かせた亀ヶ岡文化のふるさとの雰囲気を楽しんで帰路についた。途中秋田県大潟町の環状刻石を見て、二日にわたる好天にめぐまれた遺跡の旅を終えた。



春の遺跡めぐり(下小松古墳群にて)

春・夏・秋の遺跡見学会

今年度初のこころみとして、春・夏・秋の三回にわたり近隣の遺跡めぐりを実施することにしました。

春は、川西町教委の斉藤敏明さんのガイドで天神森古墳と下小松古墳群を散策、初夏のうらかな陽ざしのなかで、森林浴を味わい、古墳の数々をみてま

わった。掬粹巧芸館で中国・朝鮮の陶磁器のすばらしさに感動の連続であった。

夏は八月四日、本資料館のまわりの古墳や遺跡を親子で探検、これには十二名が参加し、あらためてふるさとの古代を見直す機会となった。

秋は、十一月十七日に稲荷森古墳、二色根古墳群など南陽市の遺跡を巡る予定。

豊かな縄文体験

縄文文化から学び、新しい創造の場を目ざして、各種の体験教室が活発に行われた。

まず六月十六日は、米沢市教委の手塚孝さんを講師に「土笛・土面づくり」。

七月十四日には、陶芸家水野哲さんを講師に土器づくり教室が催された。

八月には、暑いさ中、作品のさいごの仕上げで、野焼きが行われた。また近隣の小学校の先生方が集まって、「まが玉づくり」の体験教室も催され、これらの体験教室にはのべ八〇名が参加した。

秋から冬にかけては、一〇月二〇日に恒例の「縄文月見の宴」、二月にははじめてのこころみで



遺跡たんけん隊の出発

ある「編み布づくり」などの体験教室が開かれる。

入門講座、講演会も盛況

三年目を迎える「やさしい考古学入門講座」は、「遺跡を掘る」のテーマで、七月から十二月まで、それぞれベテランの講師を招いて一〇回にわたって開かれていた。

これには四五名の申込みがあり、常時三〇名前後が参加している。

また、一〇月一〇日には、国立歴史民俗博物館の佐原真氏による「縄文文化と現代」と題する講演会が開催され、七〇名が集まって大盛況であった。

おん だし い せき 押出遺跡

高島町深沼

南陽バイパスを高島町へむかう。コスモス街道が終るところ、太陽パン工場の東側の国道の下に「押出遺跡」がねむっている。遺跡の存在を示す標柱も何もないからわかりにくい。高島町大字深沼字押出が正式の地名だ。

ここに縄文時代の遺跡が埋もれていようなどだれも思わなかった。というのは、置賜盆地の北部にあたるこのあたりは、大谷地といつて白竜湖から南にかけて一大湿地帯であった。ようやく江戸時代の中頃に開発に着手されるが、「永荒田」と記され、水田をつくるのには大変な苦闘の歴史があった。今でも谷地舟で稲を運ぶ写真や腰まで泥田につかって田植したことが語りぐさとして伝えられている。

押出遺跡の発見のきっかけになったのは、白竜湖あたりから南下する排水路の浚渫工事によって多数の土器や石器が出土したことによる。それは一九七一年（昭和四六）であった。そこに国道一三号線南陽バイパスが建設されることになり、一九八五年（昭和六〇）より三年にわたって山形県教育委員会によって発掘調査が実施されたのであった。

北から流下する吉野川と東の奥羽山系から流れる屋代川によって運ばれた土砂によって自然堤防が形成され、これが水の流路をさえぎったために、泥炭湿地となったのである。

遺構は、上に泥炭が厚く堆積して現地表から一・八〜二メートルほど下にあった。南北に長い四〇〇〇平方メートルの発掘区内より三五棟の住居跡が発掘された。それらは縄文時代に多くみられる堅穴式住居ではなく、柱や壁材を地面に打ちこんでつくられた平地式の住居で、床面には、湿気を防ぐために丸太材を敷いたものもあった。中には高床の倉庫風のものもあり、住居の平面形は方形・円形・長円形など多様で、長軸が一〇メートルに及ぶ大型住居もあった。



押出遺跡附近いまの風景

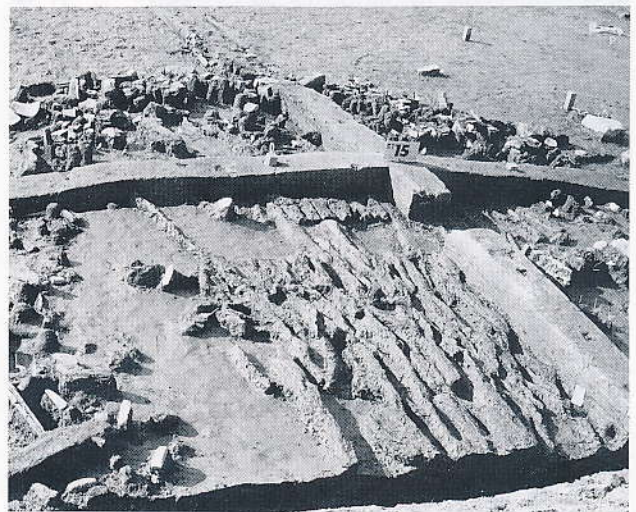
打ちこまれた柱は、地下に埋まる部分に焼きを入れ、柱根は鋭利に尖っていた。住居の構造

がよくわかるように柱の部分がよく残っている縄文集落の例はきわめて少ない。

住居群からやや離れた場所に集った場所があり、平らな石の中にクッキーを焼いたような黒い斑点がくつきり残っているものもあった。したがって集石群は、食物の調理や加熱の厨房であった可能性がある。

出土した遺物は、土器がもつとも多く、縄文前期後半の大木4式に属する深鉢が大半を占める。小型土器や獣面把手付の土器片、そして何よりも漆をもつて彩色した彩漆土器が多数出土し、五五〇年前に完成した漆技術が東北にあったことで注目を浴びた。

土器の中には、関東地方の諸磯B式、霞ヶ浦沿岸に多く分布をみる浮島式などもみられ、石斧などの石材とともに広い地域との交流が考えられる。



丸太をしいた住居の跡